

“ しら雲やただ今花にたづね会い (パソコン礼讃) ”

NAIG 飯島俊吾

今年(一昨年のこと)の正月の新聞であったか、最近、中年男を熱狂させているものに、カーとゴルフとパソコンがあるという記事が載っていた。そういえば、周囲でも、パソコンを買ったというのが若い人に限らず可成り居る。何に使っているのかと訊くと、どうも、ゲームをやったり、テレビ画面に種々とチンケな模様を画かせるグラフィックなるもので遊んでいるようである。子供が一人でコリントゲームをやっているようなもので、どうも自閉症の感がある。

所で、年輩の科学・技術者の共通の悩みであるが、以前はカード入力的大型計算機を大いに使っていたのだが、近頃、端末機が全盛になると、どうも符牒がおぼえられない。端末の前に坐ろうとしても若い人がのべつ専有している。かくして、何か計算をする時には、一々若い人に頼まなければならないという、由々しい屈辱の日々と相成るのである。

パソコンに目を付けたのはこの点である。パーソナルなのであるから、パソコンの前に坐って何時間呻吟していても、誰からも邪魔扱いされない。幸い鬱積していた問題は、我々の年輩になると沢山ある。大型機で無暗と大量の計算をすることに意義を感じている若い連中よりも、我々の方がもっと簡単で、本質をついて、しかも見通しの良い、3拍子揃った仕事の仕方が出来るはずであると考えると、矢も楯もたまらなくなって、パソコン探しと出掛けた。

探して見ると、可成り機能の良さそうな、それよりもっと良さそうな、それよりもっと……という機種がわんさとあり、安く上げたい願望と重なって、ハムレットの如く悩んだ。子供をデパートの玩具売場に連れて行ったようなもので、何に決めても欲求不満になりそうである。かくてはならじ、幸せとはそういうものではないと心に決めて、この春、桜の花盛りの頃、8ビットのパソコンを買い求めた。

お妾さんを持つのがこういう気分かどうか判らないが、それ以来、暫くは夢中である。毎日7時間近くもぶっ通しで凝っていたら、その中、背筋から脳にかけて異常を来たした。暮をやられる方は覚えがあるが、始めの頃は寝ている天井の柵目でシチョウを追掛けて悩まされることがある。パソコンもそうである。ぼんのくぼの辺りがやけに熱く、一種の知恵熱というのであろう。

パソコンの役割として所謂OAに使うことがよく云われているが、科学・技術計算に使うと実に素晴らしいと感じている。これは私文の考えではなく、米国のノースカロライナ大学のレイモンド・マレーという原子炉工学で有名な老教授も、学会の場で述べて居り、実地に、教育にその絶大な有効性を訴えることに情熱を燃やしているようである。テレビを使っただの対話形式の計算や、結果の

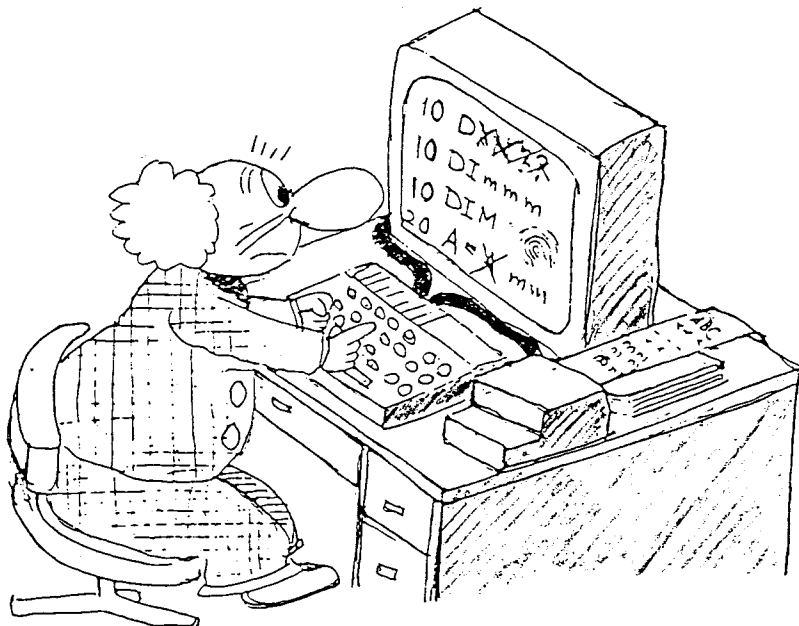
プリントがその場で手許に出て来る所などは、大型計算機に優るものがある。何しろオーナーなのであるから、計算時間等一向に苦にならない。コーヒーを入れたり、のんびりと用を足して居れば良い。プログラムやデータの貯え、管理も、自分丈の能力に応じてやれば良いというのが又、嬉しいことではないか。

実際、自分のやりたい問題を、愛機パソコンで出来るように簡明化して答を出して行くのは、大変エクサイティングでもある。

一昔前は、物理、工学の方程式、数式は、出来る丈解析的に扱うのがビューティフルであり、又、事実、必要でもあった。大型計算機の発展は、こういった美的感覚を無用、無益のものとしてしまった感がある。現代の科学計算がコンピュータ指向なのは当然であろうが、マイクロコンピュータ、即ちパソコンの登場によって、大型機に無い、親しみのある。新しい側面が開けて来たように思うのである。

「しら雲や ただ今 花にたづね会い」

これは、佐賀葉隠の冒頭の句で、筆録者田代陣基が、けわしい山道を登って口述者山本常朝に出会った時の句である。まことにその気持が良く表されている。これと比べるとは気恥ずかしいが、私のパソコンへの出会いもそういった気持ちである。多分、鉄腕ケプラー、天才フェルミもパソコンを持ったらそう云うのでは無かろうかと、これは我田引水極まるかも知れない。



(追記) 計算機のプログラミングをされた方は経験をお持ちであろうが、一応出来上っても、直ぐに、この計算部分も出来るようにしたい、どうも計算の順序が気に入らない、皆に使い易いようにするには、入力を柔軟にしたいとか、無限に改造したくなるものである。かくして、おいらんのかんざしのように沢山つめたりさしかえたりして、挙句に使いものにならなくなってしまうことがある。先に述べたマレー教授の講演ではこれを“コンピューターの原理”と呼んでいる。そのいわれはこうである。米国人は、パーキンソンの法則とか誰々の原理というものが好きで、“ピーターの原理”という法則が唱えられている。これは、「管理職者は、自分の能力でまかなえないレベル迄昇進する。(Manager rises to a level where he is incompetent.)」というのである。マレー教授はこれをもじって、計算機の素人である科学・技術者がやり勝ちの、能力以上のプログラムを作ることをコンピューターの原理と呼んだ訳である。余りわさびの利いた洒落では無いが、彼が云いたいの、マイコン用の良い科学・技術計算ソフトウェアを集積しにくいことを述べたものであった。

マイコンのソフトと云えば、あらゆるゲームソフトがこれでもかというように出て居り、亡国の憂いを感じていたのだが、先日、某所の紀之国屋書店を訪れる折があった。土木・建築、構造解析、天文学等の書棚を歩き、マイコン用のがっちりした計算プログラム集が大学関係等から可成り出版されているのを見た。不明を恥じると共に、我意を得た思いをしたものである。

(1983年7月記)

この2年来、作り上げた核データ分野のコードを自慢たらたらと云わせて頂くと、崩壊熱の感度解析、中性子捕獲効果も含めた崩壊熱計算パッケージ、捕獲断面積とその共分散計算、積分データによる群定数及びパラメータ調整、蒸発理論と前平衡理論計算、クーロン波動関数計算、その他小者多数である。いずれはDWBAもとたくらんでいる。

(1985年6月記)